

英語で伝える楽しさを体感



7/23・24
つがる地球村

市の魅力を紹介する資料を作成する児童生徒たち

国際化に対応し、夢や志を実現できる人材を育成することを目的に、「Enjoy! English Camp at つがる地球村2026」が7月23日から1泊2日の日程で行われ、市内の小中学生20人が参加しました。

活動中は日本語を使わず、全て英語でコミュニケーションを取ることがキャンプ中のルール。参加者は、うまく話せない時にはジェスチャーを交えるなどして、一生懸命に伝えようとしていました。

森田中2年の丹代清光さんは「ほかの参加者やALTの先生たちとのコミュニケーションが楽しい。英語力を高め、外国へ行く機会があれば、現地の人と交流したい」と話しました。

科学技術との向き合い方を考える

つがる市立図書館は開館10周年を記念し、科学ジャーナリストの元村有希子氏を講師に迎え、記念講演会を開催しました。

元村氏は「『科学のトリセツ』～科学との付き合い方教えます～」と題して講演。市民ら約300人が参加し、熱心に耳を傾けました。

講演では、毎日新聞記者時代にノーベル賞や宇宙開発取材した経験を紹介。科学と技術は相互に影響を与えながら発展してきたと説明しました。一方で、科学技術の発展に伴い、原子力や環境、人工知能などをめぐるさまざまな課題が生じていることにも触れ、「科学技術の負の側面について、私たちは見逃しがちです。そうした側面にも目を向けてほしい」と話しました。また、専門家に任せにせず、適切に情報を得ながら、注意深く科学技術と向き合うよう呼びかけました。



7/26
松の館

講演する元村氏

親子で学ぶ 食育体験



7/27
松の館

キュウリのスティック漬け作りに挑戦する参加者

市では、食育活動の一環として、「親子収穫体験&料理教室」を開催しました。

参加した市内の親子6組は、はじめに木造越水地区の長谷川たか子さんの畑で、立派に育ったキュウリを収穫。子どもたちは、大きな葉の陰に隠れたキュウリを夢中で探し、「見つけた!」と笑顔を見せながら、収穫を楽しみました。

収穫を終えた親子は松の館に移動し、市食生活改善推進員の指導のもと、スティック漬けやサラダなど、キュウリを使った料理作りに挑戦。親子で協力しながら調理を進め、出来上がった料理をおいしく味わいました。

車力小5年の松橋紗良さんは「大きなキュウリを収穫できてよかった。料理は大変だったけれど、おいしくできた。また作ってみたい」と話しました。

自分で探して学ぶ 地元の特産品

しげた保育園(工藤敦子園長)の年長組8人が、シジミ漁師の松橋信幸さん(富苑町)の漁場でシジミ拾いを体験しました。

同園では、卒園した子どもの祖父である松橋さんのご厚意で4年前からシジミ拾いを体験しています。

冷たい水や湖の底の砂の感触に最初はおそろおそろ入る園児たちでしたが、だんだんと慣れてくると、拾うコツをつかみ、最後にはカゴいっぱいになるほどシジミを拾っていました。

この日参加した小林一華ちゃんは「いっぱい採れて楽しかった」、松橋侑菜ちゃんは「採ったシジミ貝は味噌汁にして食べたい」とそれぞれ感想を話してくれました。



夢中でシジミを拾う園児たち

先の大戦から81年目の夏



白菊を献花する参列者

戦没者追悼・平和祈念式が執り行われ、遺族や関係者約60人が市の戦没者1,325柱の御霊を悼み、不戦の誓いを新たにしました。

式典では、倉光市長が「過去の歴史に向き合い、戦争の悲惨さと、平和の尊さ、平和を堅持する知恵を次の世代に継承することが、私たちの責務です」と述べました。

遺族を代表して市遺族会の高橋滋会長は「過去にあった記憶が忘れ去られようとしている現状に対し、戦争がどれほど悲惨であるか伝えていくのが私たち遺族の務め」と追悼の言葉を述べました。

その後、参列者一人一人が祭壇に白菊を献花し、戦禍で尊い命を落とした戦没者に思いをはせました。

プランターメロン収穫祭開催

ダイソーイオンモールつがる柏店の入口で展示しているプランター栽培のメロンが収穫時期を迎え、もりた保育園、木造北こども園、菰槌保育園の年長児19人が、市農村青少年クラブ連絡協議会(4Hクラブ)のメンバーと一緒にメロンを収穫しました。

この日、イオンモールつがる柏のしゃこちゃんコートには、4Hクラブのメンバーが手間暇かけて栽培・管理してきたメロンの鉢がずらりと並べられ、園児たちは、4Hクラブのメンバーに教わりながら、はさみでつるを切って収穫。メロンは、1人に1玉ずつプレゼントされました。

収穫を終えた園児たちは「メロン大好き!」「早く切ってもらって食べたい!」と笑顔いっぱい話してくれました。



つるを切ってメロンを収穫する園児